

現代短歌大系 3

前川佐美雄

坪野哲久

五島美代子

責任編集

大岡信・塚本邦雄・中井英夫

現代短歌大系 3

前川佐美雄

坪野哲久

五島美代子

岩波
文庫

現代短歌大系 第三卷

(全十二卷)

一九七三年五月三十一日 第一版第一刷発行

編者

大岡 信

塚本 邦雄

中井 英夫

©一九七三年

発行者

竹村 一

発行所

株式会社

三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話〇三(二九一)三三三番

振替東京 八四一六〇番

印刷所 第一印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

現代短歌大系

第3卷 目次

前川佐美雄
||| 83

坪野 哲久
||| 119

五島美代子
||| 217

解説 上田三四二
||| 339

編集協力

齋藤 慎爾

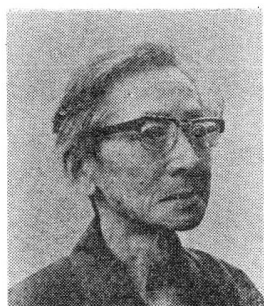
篠 弘

正津 勉

富士田 元彦

装幀 澁川 育由

前川佐美雄



前川佐美雄 略歴

明治36年2月、奈良県に生れる。同42年、忍海小学校入学、六年のとき、初めて作歌。大正10年、吉野農林学校卒業、竹柏会入会。14年、東洋大学卒業。15年、「心の花」の編集・選歌。昭和5年、第一歌集『植物祭』刊。同6年、「短歌作品」創刊。『前川佐美雄集』刊。9年、「日本歌人」創刊。12年、野沢緑子と結婚。29年、大阪読売新聞歌壇、朝日新聞歌壇選者。37年、帝塚山女子短大講師。39年、『搜神』刊。42年、東洋大学相談役。46年、『白木黒木』刊。47年第六回釋迢空賞受賞。前記の他、歌集に『くれなゐ』（14年）、『大和』（15年）、『白鳳』（16年）、『天平雲』（17年）、『春の日』（18年）、『日本し美し』（18年）、『金剛』（20年）、『一莖一花』『積日』（22年）、『鳥取抄』、評論集『短歌隨感』（21年）等がある。

前川佐美雄 目次

白木黒木

(完本)

〇〇7

抄

〇〇3

搜神

前川佐美雄論

桶谷秀昭

〇〇1

抄出について

出来得ればこの巻は『搜神』を収めたかったが、千二百首という歌数のため果せず、『白木黒木』を完本とした。あとの抄出を依頼されたが、『搜神』の中でも代表作である「鬼百首」は必ず入れてほしいということだったので、わずか残りの数十首を選んだにすぎない。せめてそのためにきらめく秀歌が凝集したといえることを念じている。

中井英夫

白木黒木（完本）

目次

昭和四十一年

室生龍穴(三首)……………二	星族(五首)……………二〇	鳴門の月(八首)……………二〇	雲雀語(五首)……………一九	飛鳥川上(三首)……………一九	近江春(七首)……………一八	つつじ祭(三首)……………一八	秋保温泉抄(二首)……………一七	仙臺抄(二首)……………一七	勿來まで(十八首)……………一六	をがたま(五首)……………一五	初午(五首)……………一四	冬の幻(八首)……………一四	ことつづき(十一首)……………一三	寒鹿抄(六首)……………一二	新春(三首)……………一二
----------------	---------------	-----------------	----------------	-----------------	----------------	-----------------	------------------	----------------	------------------	-----------------	---------------	----------------	-------------------	----------------	---------------

昭和四十二年

冬の鳥(五首)……………三	飛鳥冬(五首)……………三	格衣(五首)……………三	冬ばら(四首)……………三	矢田金剛寺(五首)……………三	甘樫丘月見(三首)……………三	秋の海(十三首)……………三	枯れ蔦(八首)……………四	國栖(三首)……………四	白木黒木(八首)……………四	殘亡抄(十三首)……………五	嵯峨菊(七首)……………七	星まんだら(七首)……………七	東征繪傳(五首)……………六	森の奥(十一首)……………六	師走(二首)……………六
---------------	---------------	--------------	---------------	-----------------	-----------------	----------------	---------------	--------------	----------------	----------------	---------------	-----------------	----------------	----------------	--------------

昭和四十三年

節分	(三首) ……三
修二會	(二十首) ……三
法隆寺會式	(三首) ……三
春日の藤	(五首) ……三
葛城あたり	(三首) ……三
六月小情	(三首) ……三
みむろ夏	(五首) ……三
稻荷初夏	(八首) ……三
曾爾古道	(三首) ……三
奥飛鳥みち	(三首) ……三
春日九月	(三首) ……三
黒部の紅葉	(八首) ……三
國なかの村	(五首) ……三
朝時雨	(四首) ……三
柿	(五首) ……三
寒牡丹	(五首) ……三
大和新年	(三首) ……三
紅霞	(五首) ……三

昭和四十四年

冬の鹿	(八首) ……三
若草山焼	(二首) ……三
穴師の里	(五首) ……三
京の病院より	(三首) ……三
秋	(三首) ……三
晩年に似る	(十二首) ……三
野良猫	(五首) ……三
火焚祭	(七首) ……三
女児	(二首) ……三
寒くなりつつ	(九首) ……三
錦木	(四首) ……三
檜原の岡	(五首) ……三
玉	(五首) ……三
春	(四首) ……三
新蓬序	(五首) ……三
金魚祭	(九首) ……三
四天王寺	(四首) ……三
葛城	(十首) ……三

一言主(五首)……五
 松の花(十一首)……五
 雨の日(十四首)……五
 運命(五首)……五
 白鳥抄(二首)……五
 須磨即事(五首)……五
 伊豆にて(二首)……五
 城が島(四首)……五
 人ならぬ鹿(三首)……五
 西行庵(五首)……五
 多賀(二首)……五
 十一月九日(四首)……五
 檜の實(十七首)……五
 枝折戸(十一首)……五
 紅葉(九首)……五
 冬日あまねき(十首)……五

昭和四十五年

冬 漢々(二首)……五
 冬の日(二首)……五

時雨する日(五首)……六
 冬鳥(十三首)……六
 冬平城宮址(五首)……六
 ひんがしの火(四首)……六
 花寒し(九首)……六
 みささぎ道(五首)……六
 おつくう(十一首)……七
 雑念(十一首)……七
 春あらし(三首)……七
 奥千本(三首)……七
 東山中(四首)……七
 田植祭(五首)……七
 奈良長坂(三首)……七
 梅雨久し(四首)……七
 近江石塔寺(三首)……七
 暑き日(五首)……七
 涼氣(四首)……七
 天の川(五首)……七
 初秋(五首)……七
 秋の日に(五首)……七

後古晩

宴吉

能野秋

(五首) (十一首) (十三首)

…… 六 七

後

記

…… 八

昭和四十一年

新春

いさぎよきこと少し有なれ古家の煤はらひして春を迎へぬ

あたたかき正月よなと遠出して霜とくる飛鳥古國を行く

新しき年の朝明もあさけ數千羽まだ暗き空を鳴きわたりたる

寒鹿抄

ひとら去りにはかに寒く暗くなる苑のなか鹿の尾尻おしりがざびし

暗くなる杉の木の間にす西空の黄が透すけて見ゆ身窄みすぼまるなり

靄くらき木の閑出で来て黄いろなる枯れ芝しば生行く影の如くに

かれ芝の苑のみち行く日ぐれがた見覺えのある鹿も居りにし

苑のなかわれの知りをる鹿ひとつこの鹿も角を伐きられてみじめ

かつ憎みかつあはれみし片角かたづののかの荒き鹿の冬いかにある

ことつづき

早や冬の野極やきよくに獵かりし一羽いちはとてうづ巻く青の尾羽のながきを

言こと連つづ接ぎ點テニ爾ヲ衰波いかに枯れ薦わのしじにからめる壁を見つめて

わがうちの鬼遣やらはむと踏みはづし階落かいちし夢の胸痛き朝

枕べにすわりて夜夜よよを眠らさぬこのわが鬼を救はせたまへ

朝を機嫌惡ゑしきは血壓低きため猫さへ知ればあがり來らず

年の暮れを棄たく駝だ來てをり何ごともしなかり如くなり缺の音す

かび臭きブルーチーズに胃弱きを養ひて我の冬をあるなり

庭石を動かかしをるもこの家に火ひつけたくなる心堪へむため

空あをく澄めり大脳前頭葉いかにほたらく壁はすかひに

家壁のくづるる知らず薦づるの紅葉しばらく美しかりし

あざわらふ低き聲ごゑ木の上より石の閒より聞ゆるものを

冬の幻

死にたるは歸り來ずよと倉に入りつづらを開けて歎きをりしか

さむざむと時雨する日に菊膾食うべてゐればむかしに似たり

早や冬と山おりて來てあかつきの靄くらき湖の鴨撃つらむか

諫められ母にいはれて鳥撃ちを思ひとどめき十九なりしか

魚は上り鳥は落つるもなどてこの秋を歸らず病む鳥の多き

病み落ちて孤りとなれる南海の渡り鳥見るうづくまりたる

ジレンマに陥ち入らざるを得ぬといふ漢文調よ我さへ悲し

ほろびゆくつひの終りを守りあへずわが身をすらも幻にしき

初午

松尾山みち